

京鹿子

The background of the cover features a traditional Japanese embroidery style. It depicts a gnarled, brown branch with several green, triangular leaves. The embroidery uses various stitch directions to create texture and depth in the branch and foliage.

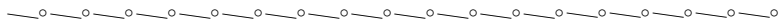
4月号

豊田都峰

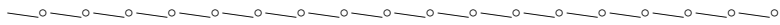
灌響集 その二十

枯 木 星 小 吉 納 め き し 身 な り
寒 日 や 一 塔 を 据 ゑ 真 言 界
大 寒 の 堂 庇 も 深 く 金 剛 界
献 灯 の ゆ ら ぎ 重 ね て 寒 御 堂
初 弘 法 き の ふ に す み し 御 燈 明
芽 木 囲 む 御 祖 よ り の 火 継 げ る 宮





春一番鳴つてゐるのは山祠
魔王秘む雪嶺日暮れをおりたたむ
屋根ごとに雪積み峡は青きひぐれ
白魚網ひかりみじんにこぼし揚ぐ
里山を描いてくれし春の雪
うすもやのごとく芽吹きて雑木山
遠嶺のひくさに下萌しばし敷く
苑の日のひとつひとつがクロツカス



雀の枕

丸山佳子



寒九の手むすび開きて一筆す
亀が岩に非凡どうしや日脚のぶ
P 奥で雀の枕に句三昧
カーブミラーにつくり笑ひをしてクシヤミ
好きになつた理由は雀の枕から

秀華採集

黒板のさびしい素数さくら紅葉

直江裕子

学問は無駄が多い方がよいという。ましてや無限に存在する素数を学ぶ教室風景。ふとよそ見の目に窓の風景が写る。もどした目に黒板は一瞬見えない。

アラジンのランプ転がる年の市

山中志津子

膝掛けのむらさき緞子寒に入る

鷺山珀眉

前句の「年の市」の設定がよい。ふとランプから大きな夢がとびだしてくるかも。後句のアンチックな設定が暖かさをもたらす。そしてゆったりと寒を迎えようという思いがよい。

鈴鹿 仁

佐保姫

野風呂忌や健脚ままに嗟峨あるき

一献のぬくみの今し水仙忌

佐保姫の先駆けとなる白い雲

いちにちを喝采として春遊び

芽吹く日のをんなの私語の艶やかに

近 詠

和田 照海

いろは丸

初釣の影絵に金波銀波かな

初日矢の沖ひとところいろは丸

島とんど倒れしかたを恵方とす

海峡に星のひとつぶとんど果つ

昼酒に酔うてをとこの海鼠突

神麓集



はんぎぎの眸に映る小宇宙
沙羅散るも白の衿持を失はず
とうがんの結跏趺坐せし坐り胼胝
糸抜きしごとく崩れて白牡丹
千枚を一枚にして青田波

林 日 圓

冬麗とは一番遠くにある言葉
そうなんだあれは夢だよ吹雪だよ
黒板の裏は大雪退路なし
煮凝りの中は灼熱かもしれぬ
露けしや優しき言葉は折れ易し

松田 都 青

箱根駅伝

北村 香 朗

初明りの箱根駅伝大沸きに
山降る眞白き富士を背にけ負ひて
湘南の長汀に咲く石路の花
ゴール近し渦寒風の日本橋
寒椿女性の実行委員長

服部 郁 史

すかんぼやさびしき言葉雲となる
濃紫陽花川の東は灯が多情
実梅熟るたましいの濃き雨一日
花蓼の小さく湿りし影のあり
夕螢とまりし紙にある濕り

四温晴

藤岡 紫 水

初硯一の字一気老い見せず
天平の蓑おおらか初鴉
寝正月天衣無縫の夢遊び
征く雲も流るる水も四温晴
松過ぎの一人に戻る夕ごころ

迎

春

丹生をだまき

書き込みに重たくなりて暦果つ
碁盤打つ音小気味よき打初め会
円山派姫小松図を掛け迎春
宇治橋に佇ち見て飽かぬ初山河
消え失せし正月行事読む歳時記

神麓集



山田をがたま
外歩く吾が身イメーシ寒日和
ヘルパーの帰る時刻や日脚伸ぶ
老夫婦一袋で足りぬ歳の豆
声あげず福豆部屋ごと三粒置く
春立や戸外のリハビリ再開せむ

回想の章 竹貫示虹

回想の濡れて生き生き櫻貝
海道師遷化ののちの残り花
文學部木の間がくれに囀れる
春愁の片手に重き廣辭苑
四月馬鹿パンと飴とに隙間あり

素心 北川孝子

年果つるなほ騒ぐもの胸おくに
りん凜とかわく空あり初比叡
まなうらにあの日の雲や初比叡
山眠る遺影とすべき写真選る
素心てふ文字大胆にお書初め

寒紅梅 柴田朱美
胸中の火種となりて寒紅梅
父の手のやうなぬくみの寒紅梅
寒紅梅女の手話のせかせかと
寒紅梅心底母を案じ居り
寒紅梅鍋を焦してしまいきり

彩あはき 伊藤希眸

寒灯の棚の砧石彩あはき
スカイツリーの光彩はなつ寒の空
彩放ち水になる日の氷湖かな
立春や沼に彩立たつ水鱗
水平線あたたかいから彩立たつてる

睦月 丸井巴水

身震へば落つ初雪が笹にあり
尾長鳥鳴くまで待てぬ大晦日
御神体見せぬ慣はし睦月過ぐ
枯れ山に月あり浄土暗闇か
冬蜘蛛が手に来て指を数へだす

和御魂とは搗きたての鏡餅
川崎光三郎
風に吹き落されし夕日かな
元朝やまづ仏壇へ正信偈
教師たりし幸せ年賀状の数
せかせかと去ぬ客来る客松の内

小堀寛

空林は冬のほひの李白かな
梅一輪煙管はだれの発明か
交番にやすらぎのあり年男
寒鵜わかれ惜めり鼻の穴
シルビアと聲はしりけり野火の國

船越美喜

早梅に茶席しつらふ天満宮
早梅に暮色かかりて忌の近し
初雀芝生に降りて足軽し
街路樹の銀杏の散りてわびしき空
はからずも白きの積みて去年今年





京鹿子集

豊田都峰選

黒板のさびしい素数さくら紅葉

千葉 直江 裕子

どこも冬缶詰の海振つてみる

兎追ひしかの山彼は風雲児
極月のしつかり締めるビンの栓

新しき年の切り口見つからぬ

老夫婦金婚祝はれ早咲梅

何もかも許したかたち大枯木

年玉の工面に老夫の事始め
成人日迎ふる孫の晴姿

渋川 東 秋茄子

降誕祭食満つ国の血と肉と

京田辺 山中志津子

アラジンのランプ転がる年の市

その春着曾祖父母の思ひあり
肩越しに拝す阿弥陀や紅葉光

さたま 神田 惣介

山茶花のまどろみ微風あれば足り

秋陽入る遙かに富士のシルエツト

日のかげらさへも重しと雪螢

城陽 鷺山 珀眉

肘掛けのむらさき緞子寒に人る

兎抱く少女の眼の黒目勝ち

路地裏に遊びし子等去り年の暮